

[普及事項]

成果情報名：「サキホコレ」高品質・良食味栽培の手引きの作成

研究機関名 農業試験場 作物部、生産環境部、原種生産部
(秋田の米ちから推進タスクフォース)

担当者 川本朋彦・柴田智・他17名

[要約]

秋田県で育成した極良食味米「サキホコレ」の品種の概要、食味の向上に着目した栽培のポイント、土づくり及び減農薬栽培等の技術解説、現地での栽培事例や特別栽培米の肥料試験事例を紹介した「サキホコレ」高品質・良食味栽培の手引きを作成した。

[キーワード]

サキホコレ・食味・土づくり・減農薬

[普及対象範囲]

秋田県内

[ねらい]

本県の稲作は「あきたこまち」に偏重した作付けとなっており、多様化する市場ニーズやブランド米競争の激化に十分対応できていない。そこで、フラッグシップとして秋田米を牽引していく極良食味品種「サキホコレ」を育成した。ここでは、令和4年からの本格デビューに向け「サキホコレ」の優れた外観や食味などの品種特性を発揮し、確かな品質で安定供給できる生産体制を確立するための栽培手引きを作成する。

[成果の内容及び特徴]

- 1 本手引きは、全61ページで、「品種の概要」、「栽培のポイント」、「作付推奨地域等」、「現地事例紹介」から構成される(図1)。
- 2 極良食味米生産の3つのポイントとして「登熟気温の確保」、「登熟の向上」、「刈取適期の遵守」を明らかにした(図2)。出穂期後40日間の平均気温を高くする栽培方法が白米のアミロース含有率を低くして食味の向上に寄与する。登熟歩合を高くするために m^2 当り籾数を適正にして玄米タンパク質含有率を高めない栽培方法が食味の向上に寄与する。籾黄化率85%以上で刈り取りを始め、刈り遅れないことが食味の特徴である粘りの維持に寄与する。
- 3 登熟歩合の向上と玄米タンパク質含有率を高めないようにするために目標籾数を30千粒/ m^2 と設定し、目標収量570kg/10aとする。さらに、この場合の収量構成要素を提示している。
- 4 「サキホコレ」生産者要件として土壌診断に基づく土壌改良に取り組むこととしている。本手引きでは土壌診断は5年に1回以上行い、土壌養分の変化を確認しつつ資材の施用量や種類を見直すよう解説している(表1)。
- 5 「サキホコレ」生産者要件として農薬の使用成分回数を慣行の2分の1以下(10成分回数以内)に削減して栽培することとしている。本手引きでは病害虫と雑草の防除法の解説をするとともに減農薬栽培の防除体系の事例を提示している(図3)。

[成果の活用上の留意点]

- 1 極良食味米生産の3つのポイントに使用したデータは、平成29年～令和1年に行った奨励品種決定基本調査及び現地調査、施肥反応試験、サンプル米生産圃場での調査結果である。
- 2 本手引きは、「秋系821」生産団体登録制度実施要領(令和2年6月19日施行)に基づき登録された生産団体を通じて生産者に配布される。

[具体的なデータ等]

「サキホコレ」
高品質・良食味栽培の手引き
(初版)

目次

I 品種の概要 1

1 育成経過 2

2 品種特性 3

3 食味の特徴 7

II 栽培のポイント 14

1 極良食味米生産の3つのポイント 15

2 目標収量と生育診断 22

3 栽培ごよみ 25

4 時期別・主要作業別の技術解説 26

(1) 土づくり 26

(2) 基肥 32

(3) 播種準備から育苗 35

(4) 移植 38

(5) 栽培管理(分けつ期～減数分裂期) 39

(6) 栄養診断・追肥 40

(7) 栽培管理(出穂期～成熟期) 41

(8) 刈り取り 41

(9) 乾燥・調製 42

(10) あきたe.c.o.らいす 43

(11) 雑草防除 44

(12) 病害防除 47

(13) 虫害防除 49

III 作付推奨地域等 51

1 作付推奨地域 52

2 生産者の要件 53

3 品質・出荷基準 54

4 遵守事項 54

IV 現地事例紹介 55

図1 手引きの目次

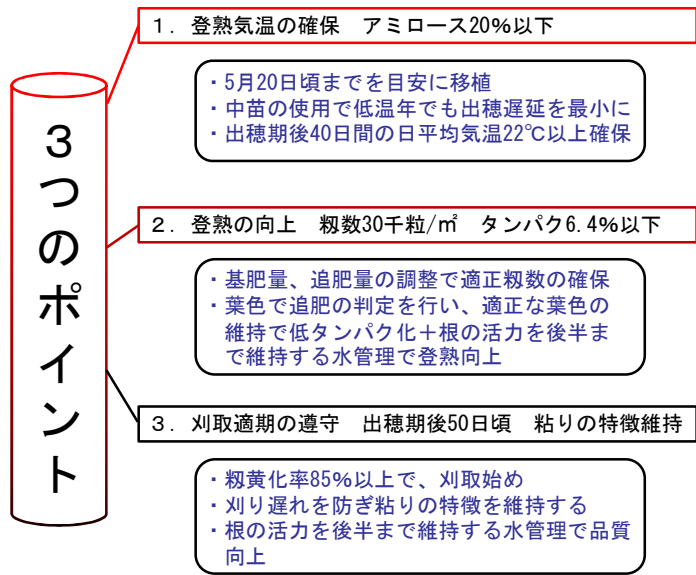
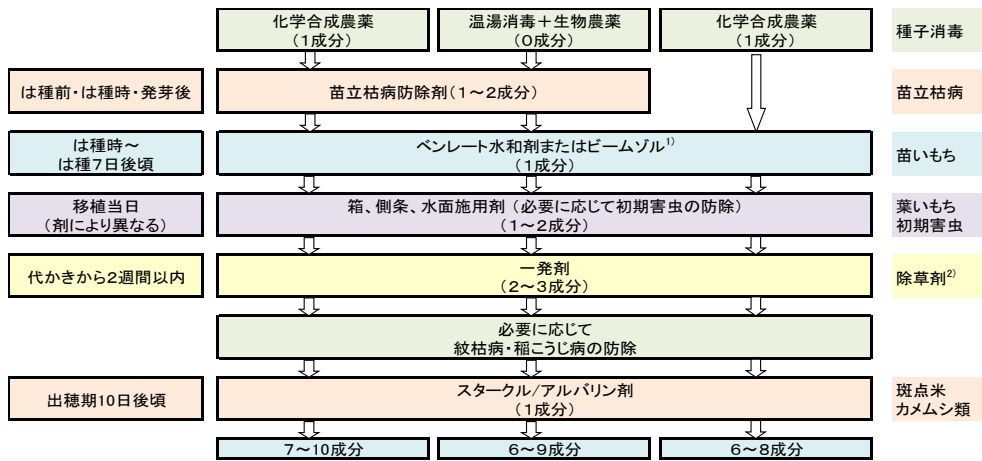


図2 極良食味米生産の3つのポイント

表1 各施肥量、資材施用量の目安

可給態リン酸 (mgP ₂ O ₅ /100g)	リン酸施肥量 (kgP ₂ O ₅ /10a)		リン酸資材	交換態カリ (mgK ₂ O/100g)	カリ施肥量 (kgK ₂ O/10a)		可給態ケイ酸 (mgSiO ₂ /100g)	資材施用量	
	稲わら	持出し			稲わら	持出し		塩基飽和度	75%未満
~ 5	8	8	要施用	~20	8	16	30未満	慣行量	慣行量 ~半量
6~20	8	8	不要	21~40	3	14	30以上	慣行量	半量~ 無施用
21~30	4	6	不要	41~	0	10			
31~	0	0	不要						



これらの体系は参考例で、地域の実情に合わせた体系を作ります。
薬剤については、JA等指導機関、農業振興普及課にお問い合わせ下さい。
1) ビームゾルは緑化始期の使用
2) 10成分以内であっても移植前に初期剤を使用しない

図3 減農薬栽培の防除体系例

[その他]

研究課題名：次代を担う秋田米新品種開発事業、秋田米をリードする新品種デビュー対策事業
研究期間：平成29年度～平成30年度、令和1年度
予算区分：県単
掲載誌等：なし